

# 幼時の追憶

その五、大洲を去る

## 神祕

クリスマス前夜、時は十二時。

「もう、みんな、ひざまづいてお辭儀をしてゐるよ」  
お爺さんが云つた、私達がかたまつて、  
燃えさしを圍んで寛いでゐた時。

私達は心に描いた、藁を敷いた

牛小屋のおきなしい生きものを。

私達誰一人として、その時牛が、

お辭儀をしてゐることを怪しむ者はなかつた。

そんな美しい想像をする人は、もう

今の世には殆んど無からう。だが、私は

もし誰かが、クリスマス前夜、

「ああ、牛のお辭儀を見に行かう。

## 曾根保

私達の幼い頃よく行つた、

向ふの谷のさびしい農家へ」

と誘つたら、暗いところを一緒に行くだらうと思ふ、

本當にさうあつてほしいと思ひつゝ。

これはトマス・ハーディの「牛」を題する短詩中の一傑作である。十二月二十五日の未明、牛さいふ牛が一齊にひざまづいて、ベツレヘムの牛小屋に生れたキリストに敬意を表するさいふ、聞くだに微笑ましい傳説を詩人は幼少の頃から教へられてゐたことであらう。ハーディは建築家としての最高の教育を受けた科學者ではあつたが、やはり宗教的、神祕的情操をも多分に所有してゐたことが想像されて、彼の性格及び作品に云ひ知れぬ魅力の存するものも、或はそのためではなからうかと思はれる。

私は生來疑ひ深い男で、時には自分の性質は刑事か何かのやうな方面に役立つのではないかさへ考へたことがあつた位である。少し大きくなつて、手品なぞを見物しても、その種を見抜くことに人一倍興味をもつてゐた。今でも銀座や新宿の夜店でやつてゐる街頭手品にはわざ／＼足を止めて、十銭の研究をするこゝもある。長い間、手品の種あかしのやうなこゝに慣れて來るに、神秘さか不思議さかいふこゝが無くなつて、攝理の懼るべき力をやゝもするに軽く視るこゝになる。私がそのやうな傲慢な氣持に浸つてゐる時、科學萬能の時世にありながら、さうしても解釋の出來ない一つの想出が飛出して來て、私に警告を與へてくれる。その想出は、遠い幼い頃のものではあるが、まゝこゝに力強く、深く根を下してゐる。

大洲のお祖母さんのお供をしてお出石さんへお籠りをしたこゝがある。出石寺は大洲の町から數里八幡濱寄りにある名刹で、かなり高いこゝであらう。こゝいふのは、そこから八幡濱の海が見えるのであるから。四國の山の中に生れた私は海を見たこゝはなかつた。この時、お祖母さんに指差されて「あれが海だよ」さ教へられたが、それこそ、雲をつかむやうなもので、全く何が何だか、分らなかつた。今でも、出石寺への道中、山路、お寺なき臍氣ながら浮んで來るが、「海」は「もやもや」したものの以外には何の印象も

ない。或は何も見えなかつたのかも知れない。雲を見て海を思つたのかも知れない。この時から數ヶ月後に愈々海を見る、否海に出たのであるが、私には海は忘れられないものである。海ほごよいものは無い。私には海ほご大きなものもない。海ほご美しいものもない。海ほご怖しいものもない。私は富士山に登つたこゝがある。しかし、二度登りたいこゝは思はない。私を育てた瀬戸内海はさうではない。あの海でなら死んでもいゝと思つたこゝさへある。人生に行きつまつて身を投げるのではない——生田春月のやうに。八歳の時に初めて知つた海、それが瀬戸内海であつたのも本當に有難いやうに思ふ。

さて、お出石の空は寒かつた。坊の二階では、たしか炬燵にあたつてゐたと思ふ。夕方が近づいた。二階から見下す廣場には消炭が廣々敷きつめられた。お祖母さんは「あの炭が眞赤におこつてくるに、その上を皆が裸足で歩くのだよ」こ仰有る。やがて信徒が蝟集し、式が始まる。私は一心に二階から見えてゐた。眞四角に敷きつめた消炭の四角に青竹を持つた逞しい僧が立つて咒文を唱へ始めた。その足許から眞赤な火が擴がつて行く。ものの三十分も経たぬうちに今迄眞黒だつた庭が火の焰に化し、立ち竝ぶ人々の顔も紅潮し、僧侶の打振る青竹も愈々急に、唱へる咒文も聲高らかに空に響き、人も火も狂せんばかり。私は息を凝らして見つ

めてゐた。お祖母さんも經文を誦して一心不亂。この世にはあり得ない光景である。するまゝ、何かしら、すべてのものが、一時に最高潮に達したと思はれた瞬間。赤裸足の僧侶が數人一列に並んで紅蓮の炎の上を何の臆するまゝころもなく、さつさみ踏んで行く。そして、すぐあまには、また少しの躊躇もなく信徒の群が口々に念佛を唱へ、勇しく進んで行く。あゝ、信仰篤きものは幸である。一大行進は燃える火の上を、地獄の火の上を、しかも悠々さ渡つて行くではないか。私は幼いながらも、驚きの眼を見張つて、たゞ言葉も無く見入つてゐた。信仰！信仰！キリストも言つた、信仰は山をも移すこゝが出来ろ。私は志成らず、倒れんまじし、希望潰えて、滅びんまじしたまき、或は心驕り、神祕を、また神を愚かしくも無視せんまじした時、この幼い頃の摩訶不思議な想出を心に浮べ、人は人の力以上のものをもつてはゐないが、一度神の御旨に叶ふ時は、人の力以上のものをも持つこゝがあるものだ。信じて自分を鞭打つて来た。お出石の神祕な火渡りの行事は、少くまも私にさつては、かやうな深い意義がある。

#### 閻魔さま

柚ノ木のお寺は何ま云つたか。その閻魔堂で見た地獄極樂の繪は餘りにも露骨で、青鬼赤鬼なまグロま云へばまここにグロで、幼い私には骨にしみるやうに怖しかつた。

家の釘拔を見てさへ青鬼を夢に見るほまであつた。甘い話ではあるが、内子まいふ村の親戚へ行つた時、近くに河原があつて、圓い清らかな小石が澤山あちこち積み上げられてゐた(恐らく村の子供が遊んだまであらう)のを見て、私は急に嬉しくなり、いつか見た極樂の賽の河原はこゝではないかま考へたこゝがあつた。であるから、その後、賽の河原ま云へば必ず内子の近くの河原を想出す愚かさを繰返すのである。人の頭は、いや私の頭は狭いものである。

#### 臥龍と城山

龜山へ行く途中に、私より四つ五つ年上の男の子の家があつた。そこではよく小さな人形芝居をして遊ばしてくれた。みんな芝居だつたか、その子が何まいふ名であつたか今は覚えてゐないが、私を可愛がつてゐてくれたやうに記憶する。肱川を股いだ龜山の向側は廣々ました然法寺河原で、白い砂原は見事である。河原の向ふに聳える松山は丁度富士山の形をしてゐるので近頃の繪葉書には「富士」ま書いてある。龜山から二三丁下るま臥龍まいふ奇岩から成る景色の良いまこゝろがあつて、藤の名所でもある。こゝに渡場があつた。私を大洲へ連れて来た徹兄はこゝを渡つて然法寺河原をサクサクま踏んで歸つて行つたこゝであらう。臥龍から更に四五丁下るま城山がある。私は幼い頃、こゝまでは餘り來なかつた。たゞ一二度、學校から來たくらい

のものであらう。今はこの城山に中江藤樹先生の銅像がある。先年、子供を連れて宇和島へ下つた時、朝の六時にこの城山を訪れた。肱川にのぞむ、二百尺ばかりの小さい城山で、樹木も餘り無くお城も無い。今は遊園地になつてゐる。上りつめた頃、子供の羣が一匹の龜を見つけた。六寸餘りあつて、恐らく捕へるのは怖いのであらう。「お父ちゃん、龜が」云ふので、私は、「かうして捕へるのだよ」教へてやつた。想へば、私が石龜を相手に遊んだのは龜山で泳ぎを習つた七、八歳の頃のこゝで、それ以後絶えて無いこゝであるから、珍らしくもあり、懐しくもある。二人は龜を持つて入口左手の銅像の前に行つた。藤樹先生の座像は等身よりは大きいかもしれないが、見た眼には、むしろさびしい。しかし、近江聖人にはその方がふさはしいやうでもある。銅像の右にゆかりの藤がある。しばらく佇んで後、寫真をさり、右に進んで、朝霧の立ちこめた城下を見下して山を降りた。河端へ行つて急流へ今の龜を放つたこゝろが、首を上げて二度戻つて來た。私達二人は不思議なこゝだと思つて手を延ばしたが、三度目に終に川底深く姿を消してしまつた。途々、二人は「多分あれは、お禮を云ひに歸つて來たのだらうよ」語り合つた。こゝによるゝ、あれが龜の習性かもしれない。浦島物語も案外そのやうな龜の著しい習性に何かの機縁があつたかも知れない。

#### 頭の禿

私の大洲の生活は終つた。この頃丁度、日露戦争があつたので、新しい母の弟の一人ミかが、軍艦初瀬ミ運命を共にしたさいふやうな話を聞いたのを覚えてゐる。次に、これは最後の出來事であるが、逸するこゝの出來ないものがある。それは、或日、鐵砲を製造してゐる工場へ行つて遊んでゐた時、何かの拍子に私は萬力に挟んだ荒削りの銃身の下をくぐつた。一寸くぐつただけであつたが、そして私は少しも意識しなかつたのであつたが、その主人か飛んで來て私の頭を押へた。その手は血だらけであつた。つまり、頭の右前二寸ばかりが切れたのであつた。すぐ醫者へ連れて行かれた。幾針かが縫はれた。それは永久に、しかも残念ながら大きな禿になつたのである。先頃、何かの拍子に文部次官やら、誰やらが、髪を切つたりして大いに何かの宣傳をしたらしいが、私は容易にそれに賛成しなかつた。そこには十分な理由があつたからである。しかし、この禿が腕白時代の名譽の負傷でないのもいささか物足りない。

#### 大洲を去る

十二月の頃であらう。何も知らない私は或る日、學校から歸るミ横林の母ミ徹兄が迎へに來て、川舟に乗せられた。何處へ行くのかも知らない。一年半前に着いた同じ處から、

又出て行くのである。さらば、柚ノ木の祖母よ、父よ、母よ。さらば、龜山よ、臥龍よ。私達親子三人は肱川を下りに下つて夕方長濱に著いた。愈々長濱に着くさいふ頃には川幅が廣く、灰色に煙つた川の面が遠く何處までも續いてゐた。「もうこの邊は海だ」を教へられたものの、それでも海の概念は得られなかつた。岸には船の数が、殆んど数へきれない程であつた。舟から上つて、安田旅館さかいふ宿屋で夕食をすませ、夜中に、ねむい眼をこすり、こすりギイギイ櫓の音をきゝ乍ら、寒い夜風にふかれて、港の外に何か騒がしく足ぶみでもしてゐるやうな眞黒な船に近づいて行つた。宿屋の番頭が提灯をもつて送つてきた。親戚の人か誰かも來た。海の香もかいだ。汽船の油の香、ベッキの香も初めて知つた。すべてが新しい世界だつた。乗船するさ、そこには宇和島から乗つて來た迪兄がゐた。不思議な氣がしたが、うまく打合せがしてあつたのであらう。ガラガラガラ、眞夜中の海に碇を巻く音、呼び子の音、やがてピストンの音、スクリュウの音、そして、さよならの汽笛が、長濱の港外に響いて、船は東を指して進んで行く。船は大阪へ！そして吾々親子四人は何處へ！

## 馬車屋

「そこんどこ、あいてるんぢやねえか」

道端の男が聲をかけた。

「いや、あいてねえ」馬車屋は答へた、

鞭ふりふり、車を速めて。

「チューンや、おめえはあの世へ行つたつて人は云ふが、

ちやんとおいらの側に一緒にゐらあ、な」

かう云つて、自分の隣にあげてある

席の方へ眼をやつた。

すると、乗つてゐる連中は小聲で、

「何處へ行くにも、おかみさんが一緒に

あそこに坐つてゐるが、空っぽになつてから

もう、すゑぶん久しいもんだ」

ガラゴロ、ガラゴロ馬車は走つた、

シドウェル教會の脇を通つて

イークスン砦も見えなくなつた。

日もどつぷり暮れてしまつた。

——トマス・ハーティ——